

暖地における茶樹の休眠特性の品種間差

八戸三千男・*近藤貞昭・池田奈実子・**築瀬好充・和田光正
(野菜・茶業試験場久留米支場・*農業生物資源研究所・**野菜・茶業試験場)

Michio HACHINOHE, Sadaaki KONDOH, Namiko IKEDA, Yoshimitsu YANASE and
Kosei WADA: Varietal Differences on Characteristics of Tea Bud Dormancy in Warm Region

茶に見られる晩秋～冬期間の生育停止現象は、日長、気温の変化による他覚休眠と考えられ、休眠移行の遅れは耐凍性の低下をもたらし、更に翌春の一番茶収量や品質も休眠と関連のあることが指摘されている。暖地では秋冬期の気温が高く温暖地に比べ生育停止期が遅れる傾向にあるが、暖地向品種としてはこの気象条件に十分適応できることが必要であることから、休眠特性の品種間差について基礎的な調査を行った。

1. 材料及び方法

供試材料は、第1図、第1表に示す早・中・晩生品種。休眠移行期、覚醒期の判定や休眠程度(休眠の深さ)の測定は次の方法によった。硬化した徒長枝を圃場から採取し人工気象室(25-20℃12時間変温、全日長)内で水挿し、1週間以上萌芽しない時「休眠入り」、1週間未満で萌芽した時「覚醒」と判定。休眠程度は萌芽までに要した日数で表示。調査は1985年～1987年11月～4月、1週間間隔で実施。

2. 結果及び考察

1) 供試品種の大半が12月中旬(最短日長期)に休眠入りと判定された。覚醒期は早晩性と明らかな関連を示し、早生種2月初～中旬、中生種2月下旬～3月初旬、晩生種3月中～下旬。圃場での萌芽期は早生種3月上～中旬、中生種3月中～下旬、晩生種3月下旬～4月上旬。休眠期間の長さは、早生<中生<

晩生、覚醒から萌芽までの期間は、晩生<中生<早生、の傾向にあった。くらすわは他の中生種に比べ休眠移行が早く覚醒が遅れる特徴を示した。

2) 12月下旬以降の休眠程度には一般に 早生<中生<晩生 の関係が見られ、冬期間の休眠は早生種は浅く短く、晩生種は深く長く、中生種はこの中間の特徴を示したが、くらすわは中生種ながら晩生種と同程度の休眠特性を示した。休眠程度は早・中・晩生種とも12月末を

Table 1. *Degree of dormancy in tea varieties.(1986-1987 Makurazaki)

		Dec.		Jan.		Feb.		Mar.						
		24	31	7	14	21	28	4	10	18	25	4	11	18
Early variety	Benitachiwase	13	16	13	13	11	10							
	Makinoharawase			13	13	17	16	13	11	11				
	Yutakamidori	10	19	20	18	14	13	18	13	11				
	Asatsuyu			13	13	13	11	7	13	7	11			
	Mean	12	16	15	14	13	12	15	10	11				
Medium variety	Kurasawa	26	27	25	24	23	16	17	14	14	11	10		
	Yabukita	16	19	18	18	17	16	13	7	11				
	Toyoka	26	13	13	18	11	16	7	7	16				
	Sayamakaori	10	16	16	13	7	13	13	7	11	7	7		
	Hatsumomiji	10	27	20	13	11	13	13	14	11				
Mean	18	20	18	17	14	15	13	10	13	9	9			
Late variety	Kanayamidori	13	27	25	21	20	16	20	19	14	11	10		
	Okumidori	23	27	20	21	23	20	25	22	18	17	17	15	14
	Benihikari		19	13	13	20	20	20	7	11	7	17	14	10
	Yamatomidori	28	27	25	24	23	20	25	22	21	14	17	17	14
	Mean	21	25	21	20	22	19	23	18	16	12	15	15	13

*Degree of dormancy is showed by days to sprout in 20℃-25℃ and 24hr day length treatment.

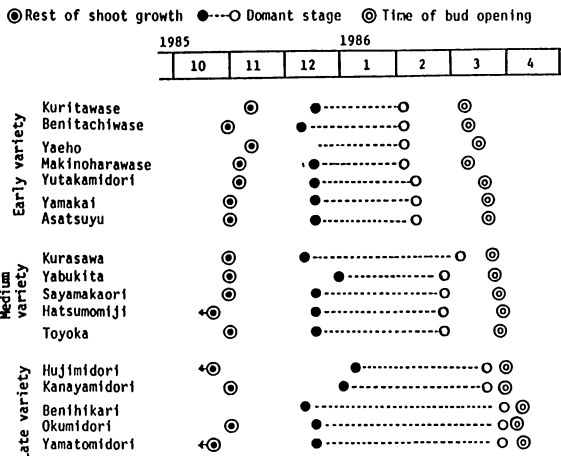


Figure 1. Characteristics in the growth of tea from autumn to spring. (1985-1986 Makurazaki)

最大として次第に小さくなるが、早生種が覚醒する2月中旬以降の休眠程度には明瞭な早晩性との関連が認められた。

以上のような休眠に見られる早、中、晩生品種間の傾向、くらすわなどに見られた特徴は、調査を行った各年次に共通に観察され、休眠特性は基本的には早晩性と関連した特性であること、品種間差が認められることなどが明らかにされた。また最短日長期の12月中旬に多数の品種が休眠移行したことは、暖地での休眠導入が短日と強く関連することを示唆したものと考えられた。